

国際文化学科における基礎演習の取り組み

澁谷 鎮 明

1 はじめに

国際文化学科では、国際関係学科と共に、1999年のカリキュラム改正で低学年向けの「基礎演習」を開講し、現在に至っている。これは本学の中で最も早く開講された低学年向けの演習科目である。しかしながら、学科学部内で重要視され、これまでさまざまな取り組みがなされたこの科目について、文章の形で整理・検討されたことがなかった。またそのような学科・学部全体での努力と、その成果について、これまで十分に発信してこなかった部分がある。

そこで本稿では、国際文化学科における基礎演習について、これまでの経緯と取り組みを振り返り、その上で国際文化学科における現在の到達点、すなわちどのようなねらいと目的を持ってこの基礎演習を運営し、現在どのような内容となったのかについて述べる。またそれを通じ、今後に向けその成果と問題点について整理検討を試みたい。なお、基礎演習設置の経緯などについては、かなり以前のことであり、十分な記録がなく筆者の記憶に頼った部分も少なくない、それゆえ多少の誤りがあるかもしれないことを了承されたい。

2 基礎演習科目設置の経緯とカリキュラム上の変遷

国際関係学部において、カリキュラム上に「基礎演習」が登場したのは学科ごとのコース制を設定した1999年の改正の際である。このとき、川端香男里学部長（当時）などの提案で、低学年学生向けの演習科目を設定することとなった、このときのおおよその目的は、3・4年生になってもハンドアウト（レジュメ）が作成できない、討論に参加できない、学術書が読めないなど、基礎学力や技術に欠ける学生が見られたことから、少人数クラスでの基礎学力・技術向上にあった。また低学年で意欲を無くしたり、あるいは友人ができずに孤立するなどの理由で退学する学生が見られたことから、学生の居場所作り、および教員との接触・相談の場所を作るということも目的の一つであったと記憶している。

すでにその前年には、国際関係学部の2学科の教員有志が、意欲のある学生に対して、担当科目外でいわば「課外ゼミ」を試みている。筆者は当時、原田講師（現・国際関係学科教授）、上野助教授（現・和光大学）、

滝沢助教授（現・桜美林大学）などの教員が実施したものと記憶している。内容は国際関係学部で必要となるであろう基礎的な文献を学生と読むというものであった。すでにこの時に、カリキュラム上1・2年生が「野放し」であり、意欲をなくしてしまう者がいるなどの問題があるという認識があったものと思われる。

カリキュラム上に基礎演習を設置した際には、すでにセメスター制が施行されており、基礎演習Aを1年生後期（秋学期）に、基礎演習Bを2年生前期（春学期）に開講するという、若干変則的な形で行った。これは、当初1年前期は学生に大学に慣れてもらい、1年秋から基礎力を養成するという発想と、教員配置に限界があり、少ない科目を1～2年に効率的に配置し、低学年全体をカバーするという発想があったものと思われる。また文系の学部において、少人数の演習科目は最も重要であるとの認識があり、当初より必修科目として設定された。

しかし2001年のカリキュラム改正で、やはり1年前期からの学生のケアが必要との意見があり、1年前期・後期に基礎演習A・Bが配置されることとなった。さらに2002年の改正では2年前期・後期に2年向け演習である「研究入門A・B」が設置され、1年から4年まで必修の演習科目でカバーされることとなった。

その後、2年前期に必修の演習科目である研究入門Aがあることで、この時期に不在であるオハイオ大学への留学参加者が履修できず、しかも科目読み替えが出来ないということから、必ず研究入門Aを後期にも開講しなければならなくなったことと、全ての学年で少人数の演習科目を教員が担当するケースがあるなど、教員側の負担が大きいという判断があり、研究入門Aは2004年度のカリキュラム改正の際に廃止され、2年後期にのみ研究入門が開講されることとなった。

2006年度まで実施されたカリキュラムでは、1年春学期に基礎演習A、秋学期に基礎演習B、そして2年秋に研究入門が開講されている。2007年度入学生からは、2年春に研究入門A、2年秋に研究入門Bが開講されることになり、以前のカリキュラムと同様になった。

なお、基礎演習の受講者の人数は、おおよそ7人から15人程度までの少人数で行われ、クラス数は5～10クラス程度であった。

3 基礎演習の内容の変遷

上記のような目的を持って行われた基礎演習は、内容的にはどのようなものであったのだろうか。内容の変遷について筆者の記憶の限りではあるが、その経緯を記しておきたい。

大まかに見ると、本学科の基礎演習は「平易なテキストの輪読」中心から、次第に大学生活および文系学生としての基本的な能力を高めるという方向に変わっていったように記憶している。特に1年生春学期に開講される基礎演習Aは、大学を使うためのトレーニングまでを含み、「大学のサバイバル・キット」(小島亮教授のシラバスより)になりつつある。逆に一貫して変わらないのは、学生の学力不足を補い、居場所・相談場所を作ろうとする発想である。さらにいうならば、専門性・ディシプリンに関わる内容、語学学習よりも、どちらかといえば基礎的な学習能力の向上にこだわってきたことも、変化しなかった点であるといえるだろう。

基礎演習がはじまった当初は、本学科の内容とも関連する平易な新書本をテキストに指定し、基本的にはそれを輪読するという方向で行った。その際には「日本の心：文化・伝統と現代」(丸善ライブラリー)、「エビと日本人」(岩波新書)など新書版の3つの文献を指定し、教員がいずれかを選んでテキストとした。このテキストの輪読を通じて、学生にレジュメの作り方や、ゼミでの発表・討論のしかたを教えるなどの目的があったものと記憶している。また図書館を使ったことのない学生もいることが予想されたため、図書館ツアーを必ず実施することとした。それ以外の内容については事実上各担当教員に一任された。

当時のシラバスを見るならば、「授業の主旨」には「1・2年次のうちに専門基礎的な知識獲得と運用の訓練を行い、3・4年次において本格的に展開される高度な専門課程の講義や演習に向けて橋渡し役を果たす」とあり、3年以降のゼミの前段階としての位置づけがなされている。

また「授業の目的」には、「基礎演習は、少人数ゼミの形式を取り、学生諸君の「読み」「書き」「話し」「聞く」という基本的能力を磨くこと、つまり、専門研究に必要な情報を収集し、分析し、報告し、そして討論するという知的作業に関するスキルアップを主たるねらいとしている」とある。さらに続けて「本演習を通じて、諸君は、専門書を読むための知的体力を養成し、報告やレポート作成を的確に行い、友人たちとしっかりと議論していくための知識運用能力を身につけることができる。そうして諸君の専門的関心が広がり深まることは、3年次・4年次の講義・演習と卒業論文の作成に大いに役立つであろう。」とあり、やは

り「専門研究」に入る前の基礎的な能力の養成に重点が置かれていることが理解できる。

2002～2003年度には、1年前期開講の基礎演習Aにおいて、「英語クラス」を設置している。これは、入学時に特に英語を学びたいという意欲の強い学生に対応したものである。この際には入学時に学生の希望を取り、フレッシュマンテストの結果をもとに、クラス編成を行った。「英語クラス」は、一部学生には好評であったものの、学生の意欲を尊重したため、教員の予想を超えて英語力が低い学生が受講し、担当者はかなりの苦勞を強いられた。結果的に「本来の基礎演習の目的に立ち返るべきである」などの意見もあり、2004年度からは実施しないこととした。この際に、英語教育の資格や経験がない学科内の教員が、基礎演習において、英語の基礎的な文法ができていない学生に英語文献などをつかった授業を行うのは、かなり困難であることが理解された。

一方でこのころから、いわゆる「輪読」だけでなく、より基礎的な内容、たとえばレポートなど文章の書き方、文献や情報の検索方法、レジュメの作成方法、文献の読み方などに踏み込んだ内容を教えるべきであるという認識が生じた。そして複数の担当者が個人的な努力でさまざまな試みを行った。これは学生が輪読だけでは退屈に思ったり、輪読に必要なハンドアウト(レジュメ)を作成するところまでなかなか到達しなかったりしたため、それ以前の本当の「読み書き」レベルまで教える必要を感じたためであると思われる。

例えば筆者がこの当時行ったことをあげると、レポートの作成方法、KJ法を用いたブレイン・ストーミングの初歩、教員の「模範演技」を示してのレジュメ作成方法などを教えていた。他の担当者も、単行本を効率的に読むための「点検読書」(黄教授)などをはじめとして、さまざまな試みを行った。

しかしながらこれらの試みは各教員の裁量に任された中で行われていたために、相互の情報交換が十分に行われてこなかった。また基礎演習は機械的にクラス分けをしているので、担当者間である程度の内容の統一が必要であったが、これについておおよその指針は作成したものの、当時は十分統一されていたとは言い難い。

2004年度より、入学者全員がノートPCを購入するようになり、基礎演習の段階で、本学科に相応しい情報リテラシー教育が必要ではないかとの意見が学科内で見られるようになった。この当時、まだ高校で情報の授業がなかったために、コンピュータは持ったものの全く使いこなせない学生がいたり、できる学生とできない学生の格差が広がったりする、いわば「学科内デジタルディバイド」ともいえるべき現象が見られ、

「基礎的な能力」として基礎演習で教えるべき項目の中に、コンピュータを使うための基礎的なテクニックと、それを生かした情報リテラシーが入れられるようになった。

このような内容の統一の必要性、輪読よりも具体的な文系学生用の各種のテクニックを教授する必要性、コンピュータ利用・情報リテラシー教育の必要性などから、次第に輪読以外の部分が重視されるようになっていった。また内容の統一を目指して、学部独自テキストの作成が試みられた。

学部独自のテキストについては、2004年頃から本学科と国際関係学科が協議しつつ共通テキストを作る方針で協議していたが、本学科の案はうまくまとまらず、2005年に国際関係学科が『国際関係学・基礎の基礎』を出版した。本学科も、2005年度にコンピュータ利用の基礎を教授するため、ワークブック形式の6週分のプリントを作成した。このプリントは、1年生が全学共通科目であるコンピュータ入門で学んだ、メール・ワープロ・表計算ソフトの利用のテクニックについて再確認し、それに加えてネット検索と情報リテラシー、プレゼンテーションソフトの利用について教授するためのものであり、ある意味では「テキスト」と呼んでも良いかもしれない。これを利用して各担当者が教えることで、ある程度基礎演習Bの内容統一が成し遂げられたものと思われる。

さらに本学科では、2005年度秋学期開講の基礎演習Bで、初めて上記のプリントを使用した。その際に担当教員間でコンピュータ利用技術の差があったため、教授内容をある程度統一し、不明な点を確認するため、毎週の授業前に担当者によるFD会を開くようになった。詳しくは後に述べるが、FD会はこれ以降本学科に定着し、基礎演習の内容の統一や内容のブラッシュアップ、ひいてはリメディアル教育や学科全体の教学システムなどについても打合せをする場となった。

このようにして、当初平易な新書本をテキストとした「輪読」から始まった本学科の基礎演習は、次第に上述の大学で生活・学習していくための、前述の「サバイバル・キット」へと変化しつつあるといえるだろう。現在は「輪読」を行わないケースもあるほどである。また教員間で大きな相違点ができないように、内容は次第に統一される方向にある。

4 2005年度の基礎演習運営—基礎演習FD会の開始と「テキスト」作成の試み

次に、平成17年度における基礎演習の運営についてより具体的に記し、そこで実施された取り組みについて紹介しておきたい。

2005年度の基礎演習については、前述のように、

「学科学生内デジタルディバイド」が生じているという認識があり、秋学期の基礎演習Bでは、学生が購入したノートPCを利用しつつ、「コンピュータの基礎知識+情報リテラシー」の内容に特化することを決めた。またこれに備えて春学期中に、筆者を中心として、ワークブック形式の6週分のプリントを作成した。

春学期の基礎演習Aは、これまでと同様の輪読スタイルを含んだ形式を踏襲し、そこに大学生活・演習形式の授業への慣れ、文章力・読解力養成などの「文系学生に必要な能力」（2005年度版の筆者の基礎演習Aシラバスより）をつけるものとした。この時には「文系学生に必要な能力」について何を教えるのかについては、教員の裁量に任されていたものの、事前に基礎演習Aの「モデル」として、13回の授業（当時）で大まかに行われるべき内容について明示した。

2005年秋学期の基礎演習Bは、前述のワークブック形式の6週分のプリントをテキストとすることにした。前半部は、この「テキスト」を用い、春学期に開講されている「コンピュータ入門」の復習もかねて、基礎的なコンピュータソフトの利用を教えることとした。後半はネットサーチ、パワーポイントを用いたプレゼンテーションの基礎を教え、本学科に必要な情報収集能力と発信力の向上を目指した。資料1に示したモデルは、毎回のおおよその内容を示しているが、これは「どうしてもこのように教えなければならない」というものではなく、おおよその流れを示したものに、アイデアや使用すると良い資料等を示したものである。また当初、第8週以降は教員の裁量に任せるという案であった（後に修正）。

ここで、プレゼンテーションソフトを使った経験が少ない担当者があるなど、教員のコンピュータ利用能力が不ぞろいであることが問題となり、毎週授業前日に基礎演習Bの担当者全員（学科教員6名）によるFD会を開き、その場で毎回の授業のシミュレーションと、コンピュータ利用を学生に教授するのに不安のある教員への支援を行った。これを契機に、基礎演習運営のためのFD会が毎週開かれるようになった。

このように本来、教員のコンピュータ利用能力の問題から開かれたFD会であったが、①担当者相互の授業計画と授業スタイルの公開、②授業に用いるアイデアの交換、あるいは③教授方法の支援、④学生に関する情報交換なども盛んに行われ、一般的に閉じがちであり情報交換がなされにくい文系演習科目のFDとしては、予想以上の成果をあげたものと思われる。これはひとえに本学科教員相互の信頼関係に起因するものと考えられる。

このFD会で討議された結果、事前の「モデル」にはなかった項目が、学生の状況などを勘案しながら付

け加えられることもあった。例えばモデルにおいては教員の裁量に任せていたプレゼンテーションソフトの利用についても、全クラスで教授することとなり、さらにその発表について、「学生間の相互評価」を行うこととした。

これは、各学生が指定された内容（国や地域の文化、あるいは各種の国際問題の紹介など）について、パワーポイントによる10分程度のプレゼンテーションを行い、これを内容や発表の良し悪しについて点数で学生が相互評価を行い、改善点について自由記述をし、それを発表者に還元するものであり、学生はかなりの緊張感をもってプレゼンテーションを準備した。また発表者に還元された評価者のコメントは、逆に発表者からその評価の妥当性や内容の良し悪しについて逆評価されることとしたので、発表者以外の学生も集中して発表を聞くこととなった。なおこの相互評価法は、「面白い」「新鮮である」との評価に代表されるように、学生にも概して好評であった。なおこれを通じてほぼ全員がプレゼンテーションソフトを使えるようになっていく。

また学生の状況把握のためにも、このFD会は有用であった。1年生の中で学力に問題のありそうな学生や、元気をなくしている学生、欠席しがちな学生、あるいは極めて優秀で基礎演習の内容に不満を持っている学生などが認知され、それが担当者以外の教員にも共有され、さらには顔と名前が一致しだしたことは、それ以降の学生のケアに役立った。

2005年度秋学期の、FD会を通じた教員間の授業内容に関する討議は、それ以後の基礎演習について、教員の自由裁量を残しながら「やわらかく」授業内容を統一することにきわめて有効であった。またこのような内容の統一は基礎演習を始めて以来、初めて実施されたもので、画期的なことであると思われる。

反面、高校での「情報」科目を受けた世代の学生が入学したため、学生のコンピュータレベルが思ったより高く、テキストが一般的な学生の能力に比して簡単すぎることが判明した。またこれらの内容について、それが後々どのようにカリキュラム上役立つのかについては、曖昧な部分を残していた。さらにはこの時期に基礎演習Bの内容は統一されたものの、基礎演習Aについては手付かずの状態であり、これらの問題は翌年度に持ち越されることとなった。

5 2006年度の基礎演習運営—FD活動の本格化と「特別クラス」の設定

2006年度は、前年度基礎演習Bで行ったFD会を、基礎演習Aにおいても実施しつつ運営した。その内容についても、基礎演習Bと同様に各担当教員独自の方

法も活かしながら「やわらかく統一」する方向で行った。また基礎演習Aをこのような方式にしたことで、1年配当科目の基礎演習はABともおよそその内容統一がなされた。また前年度の授業で得た知識・情報・学生に対する認識も、2006年度の運営に生かされることとなった。

最も配慮したのは、これまでも指摘されていたことでもあるが、学生同士にコンピュータ利用能力も含め、かなりの能力差があり、それが拡大する傾向にあることと、そのために能力の高い学生が不満を持ちやすいという点である。

これが前年度に把握されたため、それに対応して「特別クラス」を設定した。「特別クラス」は、特に優秀で意欲がある学生をまとめて配置することで不満をなくし、より高次元の内容を教授する目的がある。1年秋学期の基礎演習B、そして2年秋学期の研究入門において実施することとした。クラスの編成は、直前の学期の成績優秀者と、基礎演習において特に担当教員から推薦のあった学生の混成クラスとし、各々1クラスずつ編成した。

担当教員によれば、「教えることがなくなるくらい意欲的である」「学生のマナーがこれまでにない良かった」というほど、このクラスの学生は意欲的であり、出される課題や発表を次々とこなした。基礎演習Bの特別クラスを担当した教員は、普段3年生の演習でやっていることまで投入しなければならないほど、学生側の「もっと教えてほしい」という欲求が強く、かなり苦勞をしたとのことである。特別クラスに配属された学生も満足していたようであり、この試みは予想以上の成功であったと評価してよいだろう。

このように少人数教育であることを活かし、優秀な（と思われる）学生を隔離するという方法は、今後も演習形式の授業では維持するべきであると思われる。なお、ここでは能力が低い（と思われる）か、あるいは意欲のない学生を集めた「特別クラス」は、「低きに流れたり、かえって学生が意欲をなくすのではないか」という理由から編成しなかった。しかしながら、学生の間では「教員は言わないが低いレベルの特別クラスもあるのでは」という憶測を呼ぶなどの現象が見られ、学生全体に「特別クラス」の存在をどのように知らせるかは今後の課題である。

2006年度春学期の基礎演習Aは、7クラス編成し、大学の施設の利用方法、今後4年間の目標設定、図書館の利用、レジュメの作り方と、ゼミでの発表を必須事項とし、およそその流れについてもモデルを作り実施した。また学科テキストが完成しなかったため、各教員が平易な新書本レベルのテキストを指定し、「レジュメを作成しての発表」を行う際に利用することと

した。上述のような必須事項も多いため、全ての時間輪読をするスタイルはなくなっている。この際にも授業時間後にFD会を毎週開き、担当教員の授業内容の報告と討論、学生に関する情報の共有、授業アイデアの交換などが行われた。これによってある程度の内容統一がなされたものと思われる。

秋学期の基礎演習Bにおいては、試行的な「特別クラス」1クラスを含む全6クラスを編成した。内容は①コンピュータソフト利用の基礎、②情報リテラシー、③パワーポイントによるプレゼンテーションと相互評価を軸とした。この際にも「モデル」(資料2)を作成し、おおまかな指針とした。内容は前年度の経験から、学生のコンピュータ利用能力が以前より高いことが予想されたため、上記①のコンピュータソフト利用の基礎については1回減らし、上記③のプレゼンテーションソフトによる発表を必須項目とした。

FD会においては、様々な学生の状況が把握され、それへの対応を討議した。

第一に、前述の「学科内デジタルディバイド」がさらに顕在化したことである。全体の能力はアップしているものの、課題をパーフェクトに出来る学生と、以前高校などで習った内容をほぼ完全に忘れてしまっている学生に二分され、後者の学生はすでに春学期の「コンピュータ入門」の単位を落としており、その数は全体の二割近かった。これについては各担当教員がその学生を特定しておき、個別に対応することとした。特別クラスに配属した学生を中心に、予想以上に「一生懸命やりたい」と考える者が多いことも把握された。ただこのまじめさは依存しながらの「意欲」、すなわち与えられた課題に対する意欲ではないかとの意見もあった。下手をすると「やりたいのに先生が課題を与えてくれない」となる可能性も論じられた。特に特別クラスではその傾向が強く、担当者はかなりの準備量が必要となった。この傾向はうまく活かしつつ、自ら課題を設定する方向に進ませることとした。

また学期後半になってFD会において、プレゼンテーションソフトを用いた合同発表会を開くべきであるというアイデアが出された。これはすぐに実行されることとなり、各クラスで指定された課題に対するプレゼンテーションを学生が相互評価し、その結果でクラス代表者を1～3名選定した。その上で最終回に合同授業を設定し、各クラスの選出者が発表し、さらに全員で相互評価を行って優勝者を決めるコンペを実施した。コンペではプレゼンテーション作成のために簡単なアンケート調査を行った学生が優勝し、これによってプレゼンテーションはコンピュータ上でのテクニックだけでなく、情報収集や準備が必要であることが学生に伝わったものと思う。

2006年度の基礎演習の運営は、FD会を軸にしながら、1年の春・秋学期を通しておおよその内容統一が行われた。また前年度の経験を活かしながら、教授内容の調整を行ったほか、「特別クラス」を設置し、基礎演習Bにおけるプレゼンテーション合同発表会を実施した。その反面、学科テキストについては、いまだし基礎演習を運営しながら、内容を充実することとしたために、2006年度も完成しなかった。また今後、学科全体のカリキュラムの中での位置づけと教授内容の検討は必要となるであろう。

6 おわりに

ここまで、本学科における基礎演習の取り組みについて、科目設置から現在までの経緯について触れながら、ここ2年間に試みたことについて述べてきた。最後にここまでの内容を振り返りつつ、ここまでの成果と今後に残された問題について確認したい。

これまでの取り組みによって基礎演習の内容は、全体としては文系学生としての基礎的能力の養成が目的である。この基礎演習を通じて、学生の能力のある程度の底上げがなされてきたものと考えられる。とくに「特別クラス」などのここ2年の取組によって、全体としての学生の基礎能力をアップさせるための仕組みが準備されたといえるのではない。

また、当初より考えられていた「学生の居場所を作る」という目的は十分に果たされたように思う。特に1年生から教員を身近なところで見ること、基本的には教員が身近になったと思われる。学生も教員も互いを知り、教員のほうでは学生の名前を出せば誰かが知っているという状態になってきている。教員側には、いわば学生把握のネットワークができつつある。私見ではあるが、本学科の教員と学生の間は、他大学の同系統の学科に比べかなり距離が短いように感じられるが、基礎演習はこの原因の一つをなしているとも考えられる。

その反面、本学科の場合、基礎演習の内容統一はおおよそ達成されたものの、上記のように内容は基礎的な能力の向上を目指すものであり、いまのところ学科としての専門性とは直接つながっていないように思われる。これは教員各自の拠って立つ学問分野がさまざまであることから、ある程度意識的に避けてきたようにも思われるが、そのため現在のところ、基礎演習と1年生の他の科目やその他重要な専門科目との関係は曖昧な部分がある。学科の基礎演習テキストの完成が遅れているのは、このような点も影響しているであろう。

基礎演習は、本学科のような複合ディシプリン系の学科においては、低学年の導入教育の一つのコアとな

る科目のように思われる。今後それらの問題を考慮しつつ、基礎演習をより意味のある科目にしていく必要があるだろう。とくに本年度入学した学生をみると、一部の学生には講義をただただ90分聞く、という意味での「座学」が難しくなっているように思われる。このような時に、少人数で、学生の顔がわかった状態で

作業や討論を行わせる基礎演習のような演習科目は、今後重要になるものと考えられる。

冒頭に述べたように、これまでの経緯には筆者の記憶のみで書いた部分がある。誤りや補足があれば、是非ご意見をお寄せいただきたい。

(教授 国際関係学部 国際文化学科)